

本草新編

全





陽腎男先選定

娥兩家女築愛春  
霞輕雲蔽月影流  
風迴雪華徘徊楊  
柳下遠眺送暮鴉  
嫣然不歸去有客  
且同車一妃肌  
語婀娜實與花願  
言結金石一旦何  
咨嗟千秋但可久  
婉孌豈足誇  
右一妃歌賦贈  
陽腎男先生  
承露主人



△山津伊

陽腎男先生

樂蔭



本草妓要敘

蓋ケタシ余ヨ年トシ十四五時トキ既ステニ得エテ知シルコトヲ

其遊ソノアソビヲ而知シル太夫タウフ而知シル引舟ヒキフネ

雛妓カムロノ之辭コトバヲ又知シル傾城町ケイセイマチ之

大ヲヒニ必有カナラズ若人アツテ而出カクゴトキヒト乎メイツユコヲ數ス千セン

年チ之間ノ也アヒダニ不在ズメ異國アラ其イ在コクニソレ

本草妓要敘



此乎非我之古則在于今  
コハニ アラスノ ワカ イニレヘニ  
 乎後數十年余來于楊屋  
ノチ ス ジフ 子ン ヨ キタリ アゲ ヤ  
 乃始見太夫於某之所太  
スナチ ハジメテ ミル タ ユウヲ ソレガシノ トコロニ  
 夫業已全盛如雲四方之  
ユウ スデニ セン セイ クモノゴトシ レ ホウノ  
 客接踵最後獨得陽腎男  
キヤク ツグ クビスラ サイ ゴ ヒトリ エテ ヨウ ジン ナンヲ  
 而驩矣驩則遂令罔祿抗  
ノ ヨロコブ ヨロコブ トキハ ツイニ ノ モウ ロムツヲ コウ

衡於全盛之粹者太夫邪  
コウ 中 セン セイ ノ スイニ ハ タ ヌラ カ  
 非邪腎男邪非邪則雖不  
ヒ カ ジン ナン カ ヒ カ スナハチ イエトヒ ツクサ  
 盡腎男哉是亦太夫哉  
ズト ジン ナンヲ フレ 一タ タ ユウ ナルカナ

承露主人題  
ジヨウ ロ レシ ヲシシ タイス



本草妓要叙

金之可溜而足以死苦者必嗇甫之

事也其次始末之事也余於渡世既

無所窺竊謂妓邑之遊雖無助于

身臺家督之固然能善人付合療人

初心酒可令旨歌可使妖無為祝言

而能有識夫婦之塩梅不為慙慙有

六  
五  
七  
八  
九  
十  
十一  
十二  
十三  
十四  
十五  
十六  
十七  
十八  
十九  
二十



窮色事之奧義言不隨野父之譏用  
キハルイロゴトコシ ヲウギヲコトスヲチ ヤボ ソレリニヨウ  
 有至此道之粹家業商買之外或可  
アリイタルヲロ ミチ スイニカ ゲウ シヨク バイ ノ ホカアルハ クヒテ  
 以愧小謠而勝猶粹也乎初則謂妓  
モツテハツ コウタヒシ タヒテナラ スイ カ ハ スナチ ヲモフ ギ  
 遊與慇懃不同忍戀當有眞實手管  
ユウ ト 子 ゴロ ズ ヲ ナ カ ラ レ ル コ ヒ ハ サ ヒ アル モ シ ビツ テ ク ダ  
 不欲輕施若妓遊所以使金使錢自  
ズ ホツ セ カ ク レ シ ホ ト コ ス ヲ ラ ギ ユウ ノ ユ ニ ナ リ ツ カ ヒ カ チ ヲ ツ カ ヒ セ ニ ヲ ミ ダ ラ  
 樂無酒不興無歌不娛恣情極態不  
タ シ ム ナ ケ レ バ サ ケ ズ ケ ウ ゼ ナ ケ レ バ ウ タ ズ タ ノ レ ニ 心 ビ ヨ ウ ラ キ タ イ ラ ズ  
 遺餘念苟色道之可觀倘不至諸詛  
ノ コ サ ヨ 子 シ ラ ニ コ ト ニ キ ク タ ウ ノ ベ キ ミ ル モ レ ク ハ サ ラ シ イ タ ラ シ ヨ ウ ク

之未熟也乎  
ノ ミ ユク ニ カ

交喜甲戌歲陽月望賢男陽書于  
カウ キ カウ シ ツ ボ レ ヤ ウ ゲ ツ ボ ウ ジ ン ナ ン ヤ ウ シ ヨ ス

燕禧堂  
エ ニ キ ク ウ ニ



本草妓要凡例

一 凡妓之美惡真偽固漂客之所當

識辨妓不真美苟不可買譬如白

人祇園町島内産為真未熟素人

者為美下品下劣者為惡稱新地

中白者為偽物即是賤妓之類也

諸如此類不可枚舉今用賤妓之



類而謂用白人肉尚不美而歸咎ルイヲ イツテモチユレハクジンヲニムナラズービニ

於妓物既非眞宜乎肉之不美也ギニモノ ステニ アラスニニムベナルカナニクノ ガルヤビナラ

此漂客之識妓所以最爲先務也コレ ヒョウカクノ シルギヲエヘンナリモツトモスルセニムト

一是書不錄氣味何則以妓之美惡シヨズ ロクセキミヲ ナシトナレバモツテギノノ ビアクク

不由氣味也神農本草所謂氣者離逢ガルヲヨラキミニ シノウホンガウニイハユルキハ

振懸也味者户立土器章魚津也シンケンナリ ミハ アタレバハタニスナチレレハクジン

如太夫天神耽之身上覺寒賤妓ゴトキタ ユウテンジンフケスヨニシンシヤウヲボヘカンヲセンギ

惣嫁當肌即識冷白人藝子之甘ソウカ アタレバハタニスナチレレハクジン

花車之辛中居之鹹是已此其氣クハシヤノノシンチウキヨノノカンコレノミコレソノキ

味尤著者也ミノモツトモイチルルキモノナリ

一凡妓女自江口神寄始列三百六フヨウギジヨヨリエグチカンザキハジメテレツツ

十五人島原吉原新町亦同其數フレミバラヨシハラシンニチニタヲナジスソノスツラ

以來白人湯女靜女挑者諸家妓イライイ コノカタハクジニユナコソツリモノ

品漸增至二千餘種妓之可買者ヒン ヤウヤクニレタイタルヨシユニギノノベキカフモノ



不可<sup>ズベカラ</sup>勝<sup>シヨウ</sup>舉<sup>キヨ</sup>今<sup>イ</sup>唯<sup>メ</sup>取<sup>トク</sup>遣<sup>ニ</sup>繰<sup>ヤリ</sup>繰<sup>ク</sup>尤<sup>モツト</sup>著<sup>モイ</sup>著<sup>チ</sup>耳<sup>ニキキ</sup>

陽<sup>ヤウ</sup>賢<sup>ジン</sup>男<sup>ナン</sup>識<sup>シルス</sup>

本草<sup>ホンソウ</sup>妓<sup>ギ</sup>要<sup>ヨウ</sup>目<sup>モク</sup>録<sup>ロク</sup>

太<sup>タ</sup>夫<sup>ユウ</sup>

天<sup>テン</sup>神<sup>ジン</sup>

白<sup>ハク</sup>人<sup>ジン</sup>

藝<sup>ゲイ</sup>子<sup>コ</sup>

賤<sup>ケン</sup>妓<sup>タン</sup>

惣<sup>ソウ</sup>嫁<sup>カ</sup>

已上六品

引<sup>ヒキ</sup>舟<sup>フネ</sup>

雛<sup>カブ</sup>妓<sup>ロ</sup>



端女ハレシヨ膳ロウ

靜女コソ

月切ツキガコヒ

湯女ユナ

比丘尼ビクニ

已上七品

舞子ミヒコ

冷郎ヤロウ

舟饅頭フナミンチウ

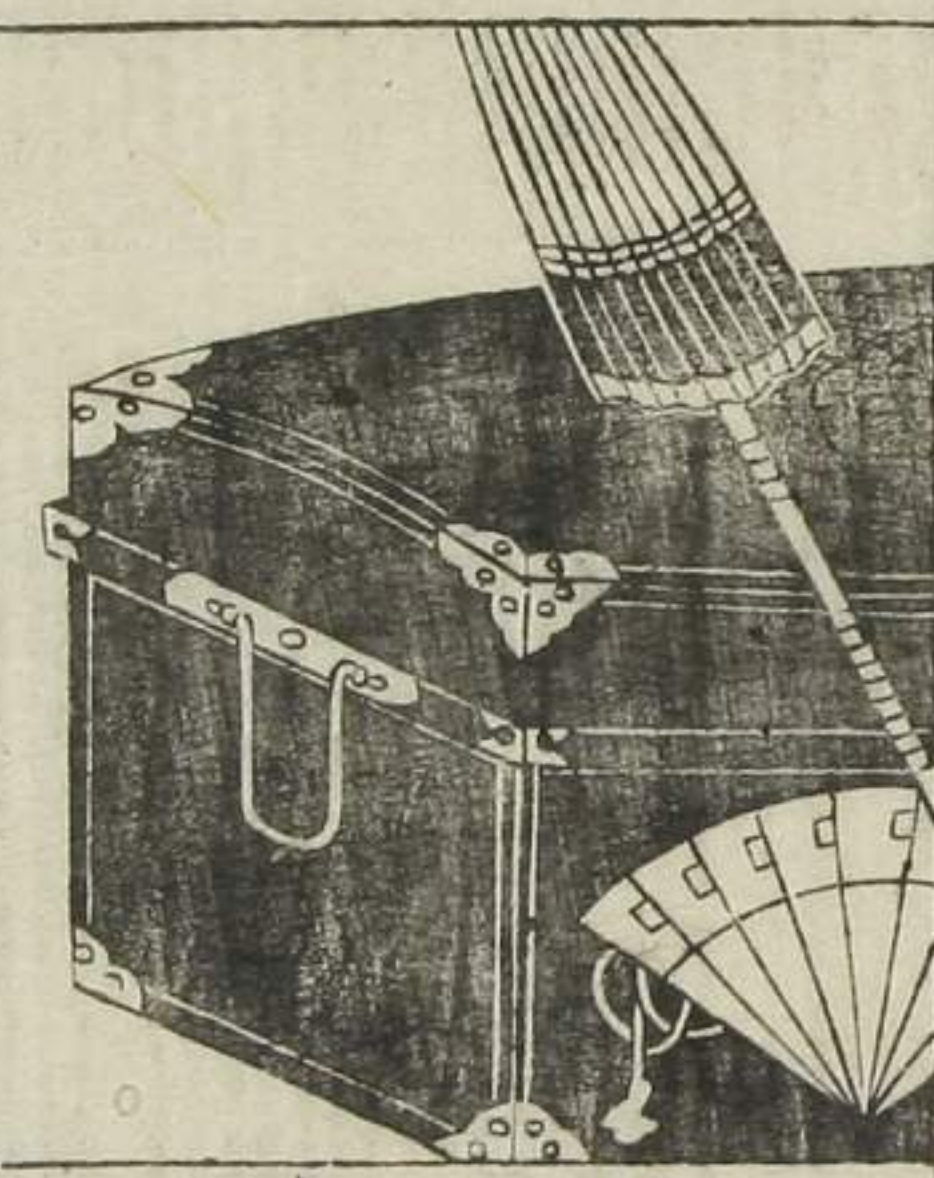
螢妓ホタル

中居ナカイ

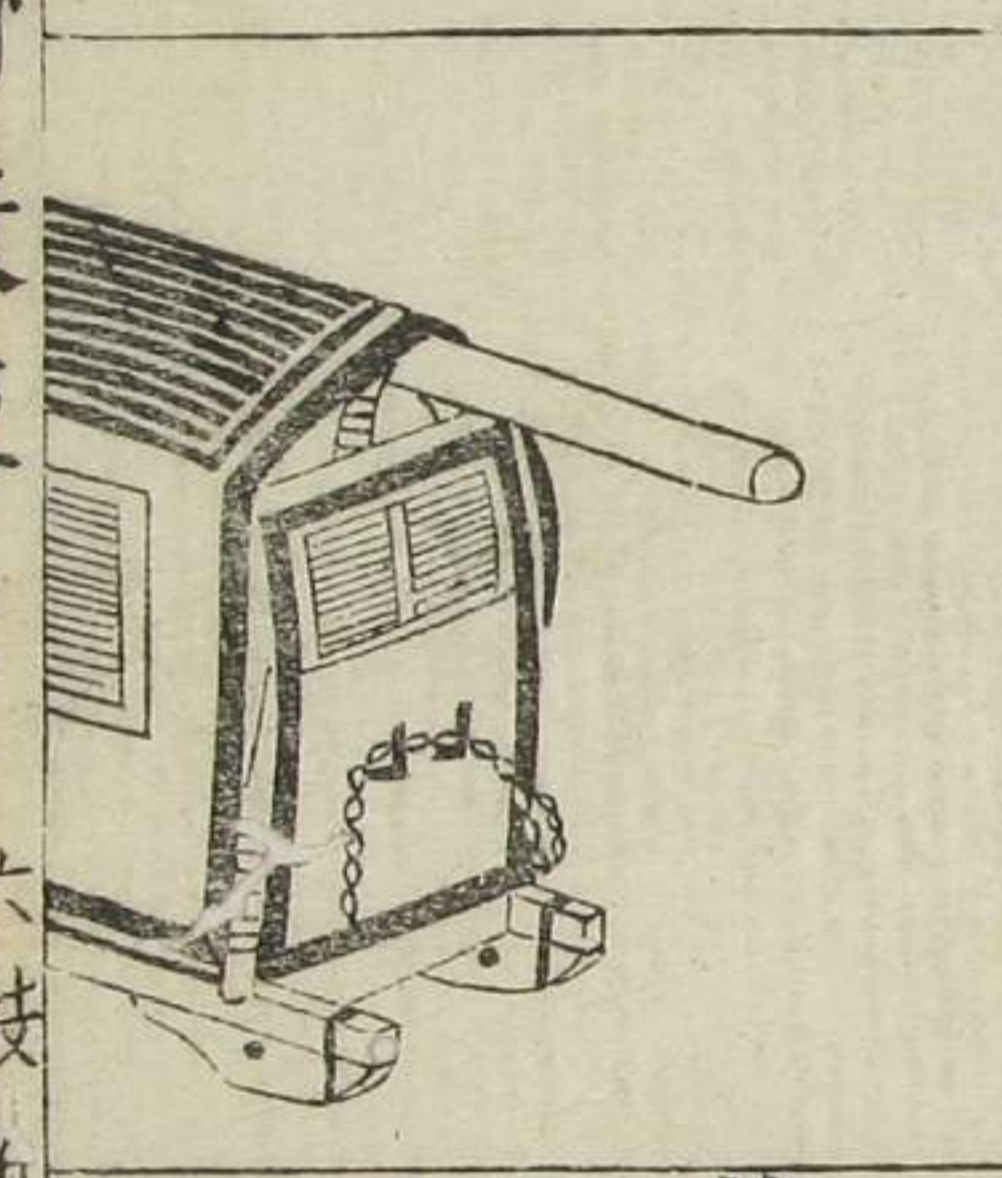
已上五品

六妓類附畧

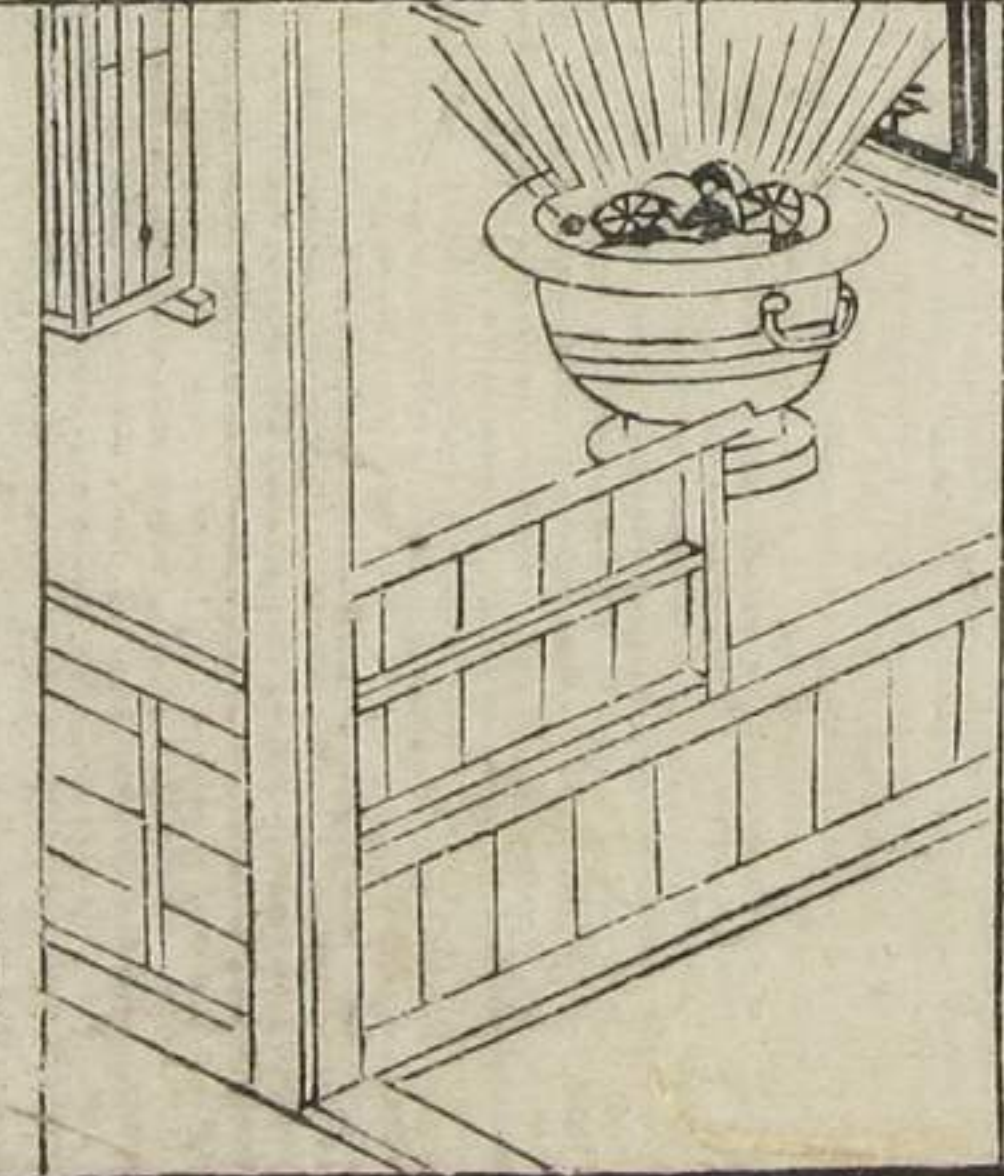
太夫



白人



天神



藝子



六中

六妓附畧

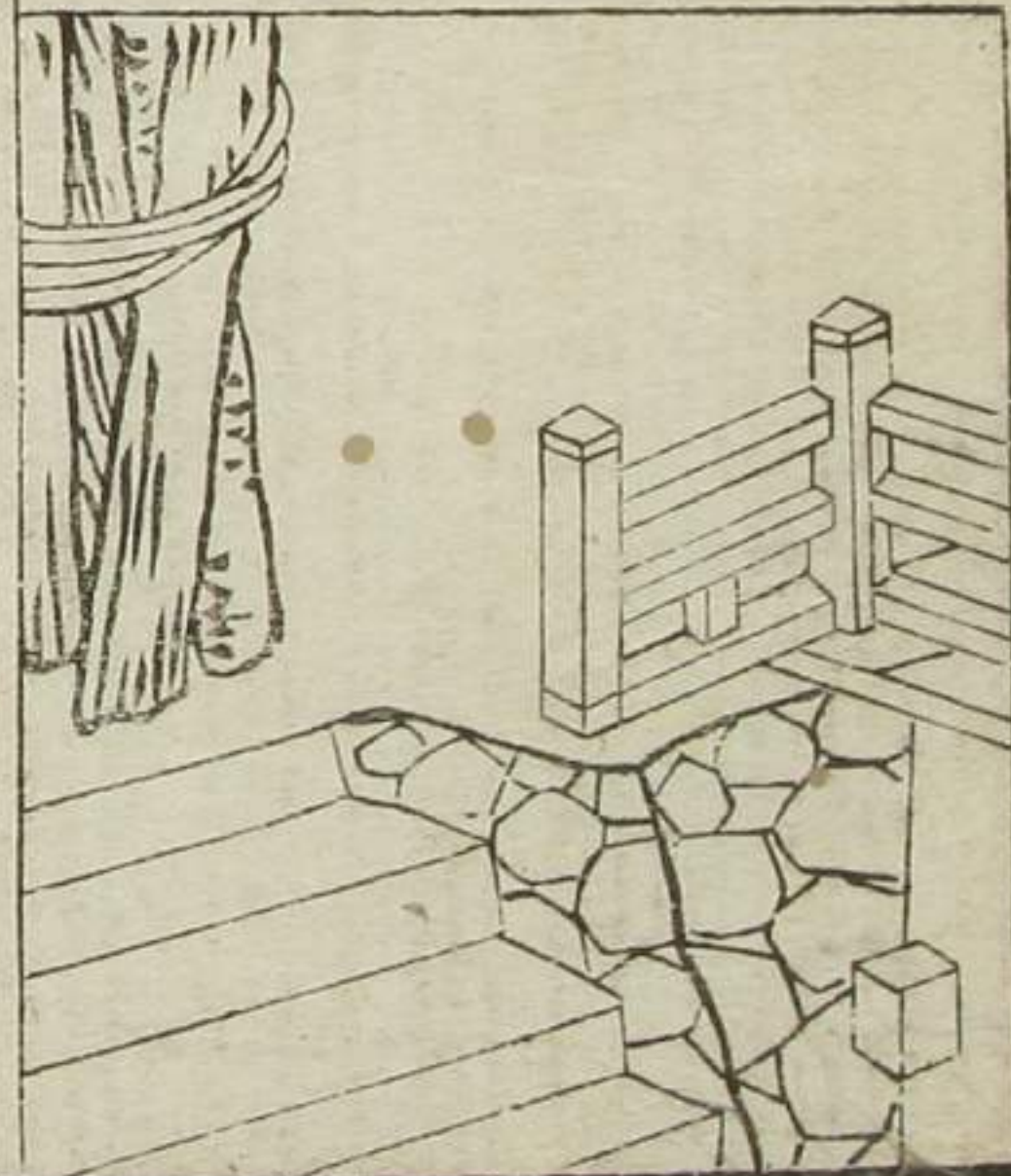


本艸要  
女要

妓 賤



嫁 葱



本艸要

巫山

陽賢男選定

太夫

太夫

主治

大様令子能座敷付療

下卑下劣之人品實為百妓中之

第一高品

審擇

凡

擇太夫不拘蒼騮但以上

等妓而手錄諸芸雖倍王侯貴人



松位

不耻者為准以京師島原所產者  
 為上出浪荖者亞之用時迎于揚  
 屋窮約束以懇丹付合任使一應  
 坐切或自期期迫等制皆不用也  
 一名松位  
 集解李時珍本艸綱目引山崎與  
 次兵衛日其所而請出三百兩予

於是有歎嗟夫廉哉妓價也較之  
 今妓價雖年高年前之白人不能  
 盡全盛者亦有此價是以古之妓  
 價不言而可知也雖至今之全盛  
 則又有異之者但恨奪功於白人  
 輸位於古昔一籌此無他彼島原  
 新町之不景氣臻家具夜具陳敗及



往來不掃除格子先之大糞座敷  
ワウライノブ サウヂカウレノサキノケンファンガシキ  
 疊之茶褐色而不知與不知皆掩淚  
タミノチャカツシキニ シルトトガレニラフニミタラ  
 甚則鏽壁之大疵雪隱之蜘蛛巢  
ハナタキトキハサヒカベ ラ、キズヒチンノクモノス  
 草履半足手水鉢之牙々虫后燈  
ゾウリカダレテツツハチノケツクチウイシトラ  
 籠之無蓋皆是久三之廉給銀與  
ロウノアキフタミナコレキウガノヤスキウギン  
 亭主之懷手之爲而非妓之所知  
テイシニフトコロテニワザラズギノトコロアラ  
 也嗚呼曾參殺人公冶長在縲維  
アソウシニニコシヒトラコウヤナラアリルイセシ

何堪大息痛歎乎蓋稽古之全盛  
ナゾタシヤタイソクツウタンスルニケダレカガフルニイニハノゼンセイラ  
 則椀爰擲豆板於節分光西聲奢  
ワンキウハナゲウナメノイタラセツブシニコウサイハフルフコラ  
 於高砂屋羊羹當此時也名妓代  
タカサゴヤノヨツカンニアタツテマコトキニメイギカレ  
 出全盛交競車長持積上於大道  
イッテンセンコモぐキノウクルマナガモナハツミアゲダイドウ  
 可借音聒於中戸大率諸州妓邑  
カリミンヨノコエハカヒスレナカドニラ、ム子レヨジウギユウ  
 之全盛以此推知則思過半矣  
ノセンセイモツテコラスイチセハスハチヲモヒスギンナカハニ

天神

天神

王治肥目高氣與太夫大挽  
シユウヂコマンメヲタカウシキヲトタユウラヒニハン

天神



本草好要

回此邑之衰微

審擇凡擇天神以風致體格稍似

太夫者為佳其富口舌長懇丹固

不待言用時迎于酒樓共醉共倒

而任使一種又妓舖有呼稱太夫

落者此品間有上等須擇用又呼

天職

落太夫

引舟 禿端女 即

小天 大天神

集解今唯單謂天神而無大小之

分名按素問新道成寺論有西方

者太夫天神引舟于禿端女臆之

語由是觀之天神本一品而古以

其價貴賤強分之已唐慎微妾類

本草曰小天神較諸大天神不啻

避三舍此說固穿鑿詭附不足據

大天神



信何則自大夫觀之豈有大小之  
異乎若又大天神以小天神為不  
如我者亦不免同天神之號而已  
乎哉  
同浴譏保體有色君子何忍為之

白人

白人

主治主間夫役者評判劇場

威嚴初相見如粹如未熟

審擇凡擇白人  
送酒樓者為真用時酒浸刻細以  
京師祇園町所產者為上出浪荅  
者亞之

素人

集解白人者本妓中之至極上品  
性味平穩甘美未熟素人者也固  
非銜妓之隊伍轉素為白故後世



中白

通爲白人モウフツシ孟子カク天子嘗論之日白馬イッ之白也無以異於白人之白也然シロキヲ而今之白人者大異之仕替諸方シヨ熟鍊此道何未熟素人之謂乎又シロウツトノ一種有稱中白者下品不足用方イヒナラシヤ有執傷寒條辨中白下日傷寒論イッ編成王叔和叔和脉經白上無中ヒト

藝子

藝子ゲイ

字由是觀之中白後人之設明矣モウクルコアキフケシ故不取也ニズ

主治

王習時花曲見合了間ツカサトルナレヒハヤリウツタヲ

審擇凡擇藝子以歌調三絃妖冶ツカサトルナレヒハヤリウツタヲ

者爲准用時漸々通屈而刻細臨モノヲスカタリトモチユルトキ

早卒間則枕三味線箱或唾壺又ソウソツノアヒダニ

稱無色シヤウスイロナシト



集解ニツ藝子ケイコ之功コト專マ在ニ座敷ザシキ凡用ソモユルニ爲シテ

彈ヒカ三味線シヤミセン而游アマフ如閨中ゴトキハケイチウノ非馴染逢アラスバニシメアフ

者モノ難用ガタシモチヒ一種イツ有稱アリ有色イロアリ藝子ケイコ者固モノモトヨリ

別種ベツ而非レユニ此物アラス故不用コノモノニカルグニズモチヒ遇關アハル或亦カクルニアルハニ

可用ベシ若然モチユモンシカス則務チツトメテ擇能エラシテ三絃ヨクスル者サシケシラ可矣モノヲカサリ

○禮記ライキ月令グツレウ云孟春ニイハクニウ月レユシツキ藝子ゲイコ化ケレテ成ナル

白人ハクシト嗟夫アハツレ物之モノ變也ニナルカナ哉コメロ小女コメロ即化ケレテ

成中ナリナ居女カイト即化レヨロウ成ケメ轎夫ナルキヨウフ之妻ノメト滔々トウクタル

者モノ皆是ミナ難推シナリ而ガタシ知シテ之博シリ古コレラ君子ハクシ請クシテ

致思イタセ焉フモヒラ

賤妓

賤妓ケンタシ

主治レユ下劣ゲレツ人品ニレ失本ジン分ビン之性ラニツスホンブン

審擇シ凡擇ニ賤妓ニ以ギラ大朴モツテ忍出ラ、ムク之類レノビデ

爲ス上用ビョウト時合モチユル擾トキ葍蒲團アハセカキ聽使テウス此物キフトン

有アリ上中下ジヨウ三等ナウ如出ゲノ京師サン者トウ新地ゴトキ



北野繩手螢妓之類不可枚舉其  
他諸州亦然不暇一一分辨

集解 賤妓常應朽腹貧漢之索以

故父服則陷借錢之淵遂坐心中

臺者指殆以千百不可屈按潛客

居類書引妓譜日游女古日河竹

又曰流身是即漂浮於墨染陸沈

於木辻之謂也以是觀之今之仕

替諸國遂銜于開帳場之小屋掛

者乎不獨賤妓之類雖太夫天神

以間夫虫入之痼疾多不免此套

是即不由正妓路不明實色學故

多為深間所惑不覺永陷苦界而

不得脫矣甚者鮑魚之肆井底之



契短  
間短

蛙不知香與大而幽惡毀善反噬  
 殆及多見其不知量也當局者迷  
 旁觀有眼况就粹學而正之乎虛  
 實遣繅尤不可不慎矣○郭僕註  
 妓雅日間短即契短音轉也然而  
 命名欠當若以坐切遊爲間短乎  
 則白人藝子非坐切遊乎何獨在

間短也故姑稱賤妓以俟他日之  
 改正耳

惣嫁

主治 主發瘡痛骨節稟寒濕  
 審擇凡擇惣嫁以清新熟實無臭

舟總嫁

氣者爲佳用時伴下濱納屋引張  
 于筵而任使凡鼻聲瘡搔鴨步等  
 制不可用又舟賣者曰舟總嫁又

惣嫁



伴遣  
迂君  
夜鷹  
一名  
夜發

呼稱伴遣物惣嫁イニシハ古昔稱迂君東靚ユウスケ

之間稱夜鷹又日夜發ホツト

集解朱震亨客知餘論曰與買物ニツカイ

嫁不如買桃而食桃有毛亦有仁モ、コテ

自此言始作俑後世道家方士之ヨリコト

徒遂和鼓雷同延及明清妓家者トツイニクハ

流阿世趨好殆依樣胡盧皆以無リウニラモノリヨフハレリヨレニホトドイヨウ

本領學問也又清馮兆張陰囊ホンリョウガクモン

祕錄曰其與不其與倚傍須嗅鳴ヒロクニイクソウカツデナイカソバヘヨツテカクテミヤア

呼是調停分疏之甚也是果媚妓アコレテウテイブンソノハナハダシキコレハタレテビギノ

甘言惑世誣客可畏也可慎也陶カンゲンマドハシヨラヒユキヤクヲベシラソルベシツシムトウ

弘景名妓別錄引三箇津名產之コウケイガメイギベシロクニヒイテサンガノツマイサン

歌曰御城于惣嫁乾蕪若粹日ウタライシクソレロソウカホシカブラジヤクスイガイハク

此物出浪巷者為第一出他州者コノモノイッルナニハニモノスダイイチトイッルタレウニモノ

惣嫁  
惣嫁



亞<sup>ツグ</sup>之<sup>コレニ</sup>人<sup>タニ</sup>○偶<sup>タニ</sup>記<sup>キス</sup>示<sup>スヨ</sup>少<sup>ワカ</sup>時<sup>キト</sup>游<sup>キア</sup>堀<sup>ンテ</sup>川<sup>ホリ</sup>觀<sup>カニ</sup>物<sup>ニ</sup>惣<sup>ミル</sup>嫁<sup>ニ</sup>

引<sup>ヒク</sup>客<sup>ヲ</sup>其<sup>キヤク</sup>形<sup>ヲ</sup>立<sup>シ</sup>葭<sup>カ</sup>簾<sup>シ</sup>覆<sup>フ</sup>筵<sup>シ</sup>瞽<sup>ビ</sup>搜<sup>ヒ</sup>往<sup>キ</sup>來<sup>ス</sup>

人<sup>ヒト</sup>於<sup>ニ</sup>是<sup>ニ</sup>丁<sup>チ</sup>雅<sup>ヤ</sup>棒<sup>ボ</sup>手<sup>テ</sup>振<sup>フリ</sup>之<sup>ノ</sup>輩<sup>ト</sup>乘<sup>カ</sup>輿<sup>ヲ</sup>與<sup>シ</sup>搞<sup>ス</sup>

盡<sup>ツク</sup>於<sup>ニ</sup>巾<sup>キン</sup>着<sup>キ</sup>底<sup>ニ</sup>然<sup>シ</sup>而<sup>シテ</sup>夜<sup>ヨ</sup>深<sup>シ</sup>人<sup>ヒト</sup>靜<sup>シ</sup>則<sup>シテ</sup>一<sup>ニ</sup>

犬<sup>ケン</sup>吠<sup>フ</sup>前<sup>ヘ</sup>百<sup>ヒヤク</sup>犬<sup>ケン</sup>吠<sup>フ</sup>後<sup>ノ</sup>是<sup>レ</sup>又<sup>モ</sup>非<sup>ズ</sup>此<sup>ノ</sup>道<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>

患<sup>ウレヒ</sup>乎<sup>ニ</sup>冒<sup>カウ</sup>者<sup>モノ</sup>請<sup>コフ</sup>察<sup>アキラ</sup>諸<sup>カニ</sup>

漂<sup>ヒウ</sup>游<sup>ユウ</sup>總<sup>ソウ</sup>義<sup>ギ</sup>

○たごのひはまうさう〜ゆうをねるゝらた

らのなまてはさひいひまらるるを利是〜

多<sup>タ</sup>球<sup>クウ</sup>志<sup>シ</sup>〜

○伽<sup>カ</sup>舞<sup>マ</sup>い<sup>い</sup>き<sup>き</sup>り<sup>り</sup>て<sup>て</sup>ら<sup>ら</sup>と<sup>と</sup>〜<sup>〜</sup>人<sup>ヒト</sup>の<sup>ノ</sup>字<sup>ジ</sup>

張<sup>テ</sup>ら<sup>ら</sup>の<sup>ノ</sup>形<sup>カタ</sup>れ<sup>れ</sup>と<sup>と</sup>短<sup>タン</sup>衣<sup>イ</sup>の<sup>ノ</sup>ふ<sup>ふ</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>れ<sup>れ</sup>る<sup>る</sup>な<sup>な</sup>

よ<sup>よ</sup>ら<sup>ら</sup>て<sup>て</sup>い<sup>い</sup>や<sup>や</sup>〜<sup>〜</sup>は<sup>は</sup>る<sup>る</sup>ま<sup>ま</sup>の<sup>ノ</sup>な<sup>な</sup>り<sup>り</sup>







○一社の時家あや女らよは月かゝり  
 ちたすれ女らよがわたりよの  
 くらねはつらばのわあるなる  
 見えし一もなり麻よはよの  
 人よを静よと静はつねのなり  
 ○喜生ぢあして首のわもゆめとよめ  
 万ははらまひけやまなむり

さんぢあうのせねなり病をよとありは  
 けはらとゆのなよと或人のい  
 ○あゆやとれはどなりてたよとある  
 やうふ合然くはよめあなごう  
 のは一なり  
 ○ある人らよまよひ自中の身なりと  
 おくハそ尾のよ一何とよあ



白中より小肘の宮になれ事おしく又切ぬ  
怒が形死なすり

○目みほこしついで指をはあさぐくはり首  
尾りけるなれりよてはさるまんとおのれ

おみ長居もやあぐよ

○一向あつげすつとおのよは何事をもい  
ぬがよす又はあまするり

○在品城通る時震るはらりを待ぼうけ  
海女に大なるさぐくはらみおみく死女なり  
よこしはやける娘を死女とおのよる  
る城はりのつるものなり

○しあまわはあつりよそち城あわらひの  
しあまのなりふそ尾なり

○老人をかきほこしがよのなりよの人



乃おのよ女房ねをば「いよねがよ」今の  
るに是あるべし

○<sup>とこ</sup>番めて女房ねをば「いよねがよ」およてを  
何よよば人よいよね事らり自然をぬら  
えわ女房ねをば「いよねがよ」およてを  
かさなわばいよね事らりよのなり

○<sup>つむ</sup>先ふも後こし「いよねがよ」およてを

男の<sup>つむ</sup>先ふも後こし「いよねがよ」およてを  
望ねばよとして「いよねがよ」およてを  
あつそれすてふなるものなりほれねば  
ひりいよねなり

○<sup>つむ</sup>ひりいよねなり「いよねがよ」およてを  
ほれねばよとして「いよねがよ」およてを  
あつそれすてふなるものなりほれねば  
ひりいよねなり



○或人乃子何女のあつば女にのる  
ははるるたものなり

○女乃身乃女なまのあつば  
顔がよしくおもむき乃なま奥うしろをどる  
事も有り

○おなと人乃女仲志なまはなを  
さうきんにおたのむとあつばのあつばは

人乃身かんな形あつばのあつばは  
もぬとあつばあつばなりきつばり今  
分刻とあつば

○あるやり人乃なま危なまななりあつばが  
あつば酒のあつばはつばのあつばは  
あつば

○はつばあつばあつばのあつばあつば



いそお救<sup>かき</sup>多<sup>た</sup>さう<sup>さう</sup>申<sup>ま</sup>なりん<sup>ん</sup>め<sup>め</sup>だ<sup>だ</sup>い<sup>い</sup>ま  
し<sup>し</sup>を<sup>を</sup>や<sup>や</sup>り<sup>り</sup>と<sup>と</sup>や<sup>や</sup>ら<sup>ら</sup>ね<sup>ね</sup>は<sup>は</sup>さ<sup>さ</sup>く<sup>く</sup>ら<sup>ら</sup>や<sup>や</sup>ね<sup>ね</sup>の  
ち<sup>ち</sup>り<sup>り</sup>ん<sup>ん</sup>わ<sup>わ</sup>を<sup>を</sup>は<sup>は</sup>ら<sup>ら</sup>も<sup>も</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>て<sup>て</sup>さ<sup>さ</sup>の<sup>の</sup>た<sup>た</sup>り  
と<sup>と</sup>や<sup>や</sup>ね<sup>ね</sup>を<sup>を</sup>ら<sup>ら</sup>さ<sup>さ</sup>や<sup>や</sup>み<sup>み</sup>や<sup>や</sup>し<sup>し</sup>も<sup>も</sup>病<sup>び</sup>を  
少<sup>す</sup>少<sup>す</sup>は<sup>は</sup>ど<sup>ど</sup>若<sup>わ</sup>み<sup>み</sup>ある<sup>る</sup>利<sup>り</sup>

○四十はどい色<sup>いろ</sup>づらひなり四十より後を  
笑<sup>わ</sup>わ<sup>わ</sup>と<sup>と</sup>び<sup>び</sup>なり女<sup>に</sup>女<sup>に</sup>よ<sup>よ</sup>ん<sup>ん</sup>で<sup>で</sup>あ<sup>あ</sup>と<sup>と</sup>ぶ<sup>ぶ</sup>ら<sup>ら</sup>あ<sup>あ</sup>ぢ

○あ<sup>あ</sup>ぢ<sup>ぢ</sup>や<sup>や</sup>い<sup>い</sup>よ<sup>よ</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>事<sup>じ</sup>あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>あ<sup>あ</sup>ま<sup>ま</sup>し<sup>し</sup>り<sup>り</sup>密<sup>みつ</sup>れ  
ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>な<sup>な</sup>や<sup>や</sup>ら<sup>ら</sup>な<sup>な</sup>り

○<sup>こ</sup>備<sup>び</sup>乃<sup>の</sup>病<sup>び</sup>あ<sup>あ</sup>み<sup>み</sup>ち<sup>ち</sup>り<sup>り</sup>女<sup>に</sup>女<sup>に</sup>乃<sup>の</sup>若<sup>わ</sup>み<sup>み</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ  
新<sup>しん</sup>ら<sup>ら</sup>ど<sup>ど</sup>や<sup>や</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>り<sup>り</sup>終<sup>しゆう</sup>一<sup>いち</sup>

○<sup>め</sup>延<sup>えん</sup>紙<sup>し</sup>は<sup>は</sup>び<sup>び</sup>る<sup>る</sup>よ<sup>よ</sup>て<sup>て</sup>い<sup>い</sup>は<sup>は</sup>ら<sup>ら</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>た<sup>た</sup>る<sup>る</sup>の<sup>の</sup>い  
常<sup>じょう</sup>乃<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>ら<sup>ら</sup>一<sup>いち</sup>

○<sup>こ</sup>床<sup>とこ</sup>と<sup>と</sup>女<sup>に</sup>女<sup>に</sup>終<sup>しゆう</sup>す<sup>す</sup>ら<sup>ら</sup>て<sup>て</sup>最<sup>さい</sup>の<sup>の</sup>女<sup>に</sup>女<sup>に</sup>あ<sup>あ</sup>ま<sup>ま</sup>い



はらあひするをのゝさのあはれあり  
女房もあまは何とておとあり  
結あはなる寄るまじく  
さくたごふもをみたるが情あり  
○女房はあはれなるが情ありはあり  
あつけんまあり

○清出は女房のあはれなるが情ありはあり

我が内みたるものあはれなるが情あり  
あはれなるが情ありはあり  
乃どくそわすとはしきも清出たる  
とくおのなるそくたたりあり  
○女房の又とておとあり  
なり女房のあはれなるが情あり  
あはれなるが情ありはあり



のしれんごちねるり

○或<sup>ある</sup>人我女をば男よたんあふさるを  
とあり一に女房のふまふま又男一  
かたば女よりおみおるるを一と<sup>いふ</sup>はに  
此をそらあしやうの

○女房にはいふもたふも<sup>たふ</sup>つるありあ  
ごしん<sup>ごしん</sup>あはは<sup>あは</sup>らうとあり

○あは女房はきそて女房のあは<sup>あは</sup>きそは  
と一<sup>いふ</sup>舟の<sup>いふ</sup>あ<sup>あ</sup>き<sup>き</sup>と<sup>と</sup>金一<sup>いふ</sup>女房あるは  
は<sup>は</sup>と<sup>と</sup>は<sup>は</sup>子<sup>こ</sup>は<sup>は</sup>む<sup>む</sup>む<sup>む</sup>り<sup>り</sup>中<sup>ちゆう</sup>指<sup>さし</sup>は<sup>は</sup>む<sup>む</sup>む<sup>む</sup>お<sup>お</sup>り<sup>り</sup>は  
か<sup>か</sup>る<sup>る</sup>や<sup>や</sup>う<sup>う</sup>に<sup>に</sup>あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>あ<sup>あ</sup>と<sup>と</sup>む<sup>む</sup>ら<sup>ら</sup>と<sup>と</sup>く<sup>く</sup>一<sup>いふ</sup>な<sup>な</sup>り

○女中の<sup>いふ</sup>お<sup>お</sup>み<sup>み</sup>は<sup>は</sup>も<sup>も</sup>お<sup>お</sup>の<sup>の</sup>房<sup>ぼう</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>の  
き<sup>き</sup>り<sup>り</sup>か<sup>か</sup>む<sup>む</sup>む<sup>む</sup>ら<sup>ら</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>  
き<sup>き</sup>り<sup>り</sup>か<sup>か</sup>む<sup>む</sup>む<sup>む</sup>ら<sup>ら</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>  
き<sup>き</sup>り<sup>り</sup>か<sup>か</sup>む<sup>む</sup>む<sup>む</sup>ら<sup>ら</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>



○若名二婚さなまむあわとよはなり  
らしき縁ゆかりかゝり申居し但ただあま  
と婚むすすては運うをとなり  
○中居なかのころころめとめとと燈火あかりのあつを  
こほすぬしつるり  
○ある川かわのほとりほとり今いまもなをそりく  
かりたさしめくぬしつるりあむ

○夜よ仲なつねおほいそよとあしんほら  
がひなるべし一ひと床とこその事ことの心こころほら  
○古ふる舞ま乃の香かのうほりまらぬ孫まごの白しろい  
がほなるり女むすめの心こころほらぬあむ  
みむね有ある  
○ある古ふるまららうとあむほらぬ  
あしんほら



○ふみあふ粉盆ハ時よりかへてそらうらま

るー

○よまははらばあしりともものねり女家の  
酒のほねハわらふとあつめいものなり

引舟 ヒキフ子

端女 ハシメ 臍 シ

静女 シヅメ

月切 ツキガキ

舞子 マヒコ

舟饅頭 フナシシ

中居 ナカイ

雛妓 ヒナカ

湯女 ユメ

比丘尼 ヒキニ

巳上七品

嗣出

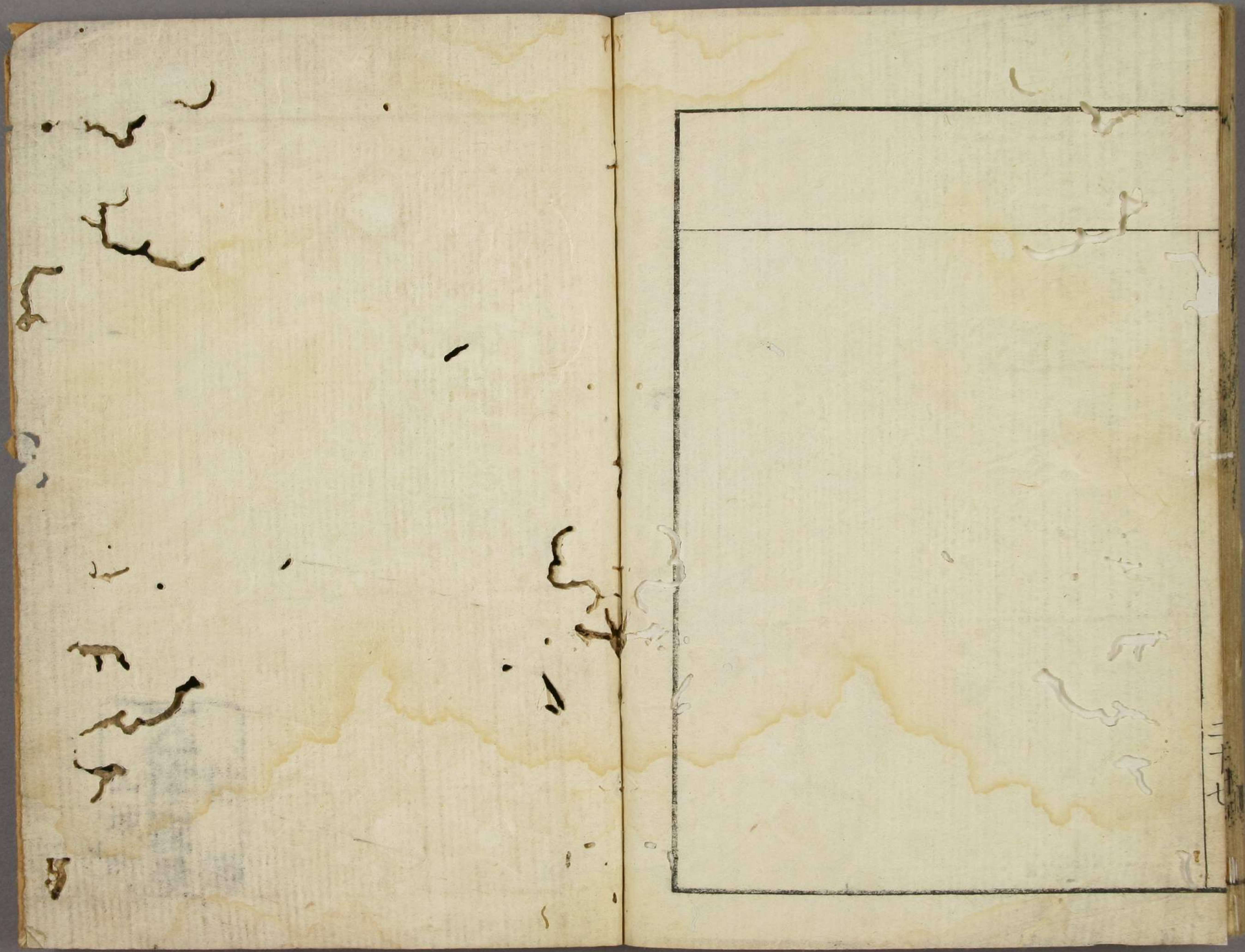
冶郎 ヤロウ

螢妓 ホタルカ

巳上五品

嗣出







△津國屋  
新橋  
山城町

安永



